

8世紀前半のカーブルと中央アジア*

稲 葉 穰

- 1 カーブルシャー王国の歴史
- 2 カーブルシャー王国の領域
 - (1) カーピシー／カーブルからガンダーラまで
 - (2) 善無畏三蔵の碑銘
 - (3) カーブルシャーとウッディヤーナ
- 3 フロム・ケサルとコータン
 - (1) コータン王家との婚姻
 - (2) トハーリスターンのハラジュ王女
 - (3) フロム・ケサルの治世
- 4 8世紀のカラコルム越えルート周辺の政治状況
 - (1) ガンダーラ, ウッディヤーナ, インダス最上流域 (附図参照)
 - (2) Paṭola Śāhī
- 5 カシミールとカーブル
 - (1) 悟空の記録するカシミール
 - (2) カシミールとコータン
 - (3) 謝肥特勤からの使節
- 6 フロム・ケサルとチベット

1 カーブルシャー王国の歴史

イスラーム教徒による征服前夜、西暦7世紀から9世紀にかけてアフガニスタン東部、ヒンドークシュ山脈南麓からガンダーラにかけての地域を支配し

* 本稿は、2008年10月1日から4日にかけて京都大学人文科学研究所において開催された国際学会“Afghanistan Meeting 2008: Reconsidering Material and Literary Sources on the 6th to the 9th Century”の場で発表した原稿の内容を、加筆訂正のうえ日本語で書き直したものである。席上、貴重な助言、示唆を与えられた参加者各位に記して謝意を表する。

た王国の歴史に関しては、我々は現在、半世紀前とは比較にならないほど様々なことを知っている。それはひとえに、アブドゥル・ラフマン (Abdur Rahman) (1979) と桑山正進 (1990) によって、この王国の歴史に関する研究が長足の進歩を遂げたことによっている。一方、いわゆる Iranian Huns に関わる貨幣についての記念碑的研究の中で、ゲブル (Robert Göbl) はカーブルシャー王国時代に発行された貨幣についても検討を加え、彼の分類と分析はその後の貨幣研究の礎となっている (Göbl 1967)。その後フンバッハ (Helmut Humbach) は、本稿の主題でもある 8 世紀前半のカーブル王弘蒜罽婆 (<弘蒜罽婆=フロム・ケサル) 発行にかかる貨幣を同定することに成功した (Humbach 1966: 22-23)。さらに、1990年代にアフガニスタン北部から発見されたバクトリア語世俗文書群は、イスラーム時代前夜のヒンドークシュ南北の地域に関する我々の知見を大きく広げてくれた (Cf. Sims-Williams 1997; 2000; 2007)。そのような研究状況にもかかわらず、カーブルシャー王国自体の歴史については未知の部分が多く残っている。桑山は主に考古資料と漢籍史料に基づきつつ、この王国の歴史を 8 世紀半ばまで丹念に辿ったが、それ以降の時代について我々が有しているのは、アラビア語やペルシア語史料の中に偶然現れる断片の情報のみである。カーブルシャー王国におけるテュルク系からヒンドゥー系への王統の変化に関するラフマンの研究も、残念ながらそのような史料的制約から自由ではない。

以上のような史料状況がその後劇的に改善されているわけではなく、筆者がここでこの王国の歴史解明に対して画期的な貢献ができるというわけでもないのだが、近年増加しつつある貨幣史料に関する研究⁽¹⁾も視野に入れつつ、本稿ではやや異なった視点、すなわちカーブルシャー王国と他の地域の関係、それらを結ぶ交通路や当時のアフガニスタン地域の政治的環境といった視点から、少しく検討してみたい。

(1) ウィーンにおいてアルラム (Michael Alram) を中心とする研究グループが、ゲブル以降知られるようになった関連貨幣の情報収集と整理分析を精力的に行っている。その概要は <http://www.khm.at/en/kunsthistorisches-museum/collections/coin-cabinet/forschungsprojekte/the-cultural-history-of-the-western-himalaya-from-the-8th-century-pre-islamic-numismatic-history/> に示されている。

2 カーブルシャー王国の領域

(1) カーピシー／カーブルからガンダーラまで

カーブルシャー王国に直接先行する時代、ヒンドゥークシュ山脈南麓を支配していたのはカーピシーに都を置く王国であった。このいわゆるカーピシー王国の歴史についても桑山正進の極めて詳細かつ信頼すべき研究がある。桑山によれば、カーピシー王の支配領域は西はカーピシーから東はガンダーラにおよんだ(桑山1990: 235-238)。

640年代、玄奘が帰路にこの地域を通過した少し後、王統の交代が起こったことが知られている。カーブルに拠点を置いたハラジュ(Khalaj)族出身の新しい王家は、かつてのカーピシー王国と同じ地域に支配を広げた(稲葉2004)。一方この王家の一人はおそらく680年代に、南方ガズニにおいて自立して王国を建てた。これらの地方を720年代に訪れた新羅の僧慧超は、罽賓と謝颺の二つの国がともに突厥によって支配されていたと記録しているが、罽賓はここでカーブルを中心とする地域、謝颺はガズニを中心とするザープリスターンを指している(桑山1992: 40, 130-131, 133-141)。この二つの地域の境界がどのあたりにあったのか、明確にはわからないが、地勢的には現在のロガル地方にある分水嶺にて境を接しているとみなしうる。ちなみにこのロガル地方にはハルヴァールと呼ばれる巨大な都市遺跡が存在することが確認されているが、治安の問題もあって未だ本格的調査はなされていない(Cf. Verardi 2007)。

さて、慧超の記述から、バーミヤーンには、ザープリスターンと同様、独立した王がいたことがわかる。また、東方ではカーブルの王の東の都であったガンダーラ(具体的にはフンド)が、カシミール、および北インドの幾つかの小国と境を接していた⁽²⁾。それゆえ、すくなくとも8世紀前半、カーブルシャーの王国の領域はほぼカーピシー王国のそれと同じであったと見なしうるが、ザープリスターンの王国が親族によって建てられたことを考慮すれば、前代よ

(2) 桑山1992: 33-41。慧超はカシミールに入る前に「新頭故羅国」という国を経由している。この国がどのあたりにあったのかについては、桑山1992: 90-93を参照。

りも広い地域に影響力を持ったと言えるかも知れない。

(2) 善無畏三蔵の碑銘

ところで『大蔵経』中には、唐代、インドから到来した僧侶である善無畏 (Śubhakarasiṃha) のために建てられた石碑の銘文が採録されている (「大唐東都大聖善寺故中天竺国善無畏三蔵和尚碑銘并序」: 大正50: 290-291)。善無畏は開元四年 (716年) に長安に到着し、そのまま中国において没した。大蔵経の記述に依れば、石碑は弟子であった李華によって建てられ、銘文も彼が撰し、長慶寺の沙門戒成が書いたとされる⁽³⁾。その碑文中に以下のような記述がある。

(善無畏は) 迦湿弥羅国を経て、夜半に河に至り着いた。河には舟も橋もなかったので、彼は空中に浮遊して対岸に渡った。一人の長者の家に招かれた。すると突然に阿羅漢が現れくだってきて言った。「私は小乗の聖人だが、大徳 (善無畏) は登地の菩薩である。」(彼は善無畏に) 席を譲って推尊した。和上が阿羅漢に素晴らしい衣を贈ると、阿羅漢は空に上昇して姿を消した。烏場国にいたった。毎日白鼠が (善無畏の周囲に) めぐりむらがり、金品を献上した。

突厥の宮廷で律を講じた時、可敦は仏法の講義をしてくれるよう求めた。そこで善無畏が樹下にて座禅を行うと、仏法の言葉が金色の文字となって現れ、空中に並んだ。突厥宮廷のある女性が自分の乳を手で按ずると、乳は三本に分かれて空中を飛び、和上の口に注がれた。彼は合掌して居住まいを正し、「これは前世の我が母である」と言った。ある者が (善無畏を) 欺き、剣をふるって三度斬りかかったが、彼の体には傷一つつかなかった。斬りかかった者はただ金属音を聞いただけだった。やがて彼は雪山の麓にある湖にさしかかった⁽⁴⁾。

(3) この碑文の撰者である李華についてヴィータ (Silvio Vita) は、彼が本当に善無畏の弟子であったかどうか、周囲の状況を詳細に検討した上で疑問を呈している (Vita 1988: 104-106)。ただそれでもこの碑文の内容が、善無畏自身が弟子達に語った内容に基づいている可能性は高いだろう。

(4) 「歴迦湿弥羅國中夜次過河。河無舟梁。浮空以濟。受謂於長者。有羅漢降曰。我小乘之聖。大徳是登地菩薩。乃讓席推尊。和上贈以名衣。遂昇空而去。至烏場國。

この碑文の内容は、10世紀に編まれた『宋高僧伝』（大正50: 714b-716a）中にはほぼそのまま引かれており⁽⁵⁾、善無畏の来歴についてこの碑文がもっとも信頼される情報源だったことがわかる。この文章を素直に読むなら、善無畏は長安にやってくる前、インド各地を巡り、その中で迦濕弥羅（カシミール）から烏場（ウッディヤーナ）へと旅して、その地の突厥の支配者の宮廷において仏教を講じ、王妃の求めで法を説いたことがわかる。その後彼は「雪山の麓」に至っているのであるから、ここに見える逸話はウッディヤーナから雪山の麓に至る間にあった出来事なのだろう。ちなみに雪山、あるいは大雪山は、8世紀以前にインドと中国の間を往来した仏教僧の伝や旅行記によく見えるもので、カラコルム山脈からヒンドークシュ山脈にかけての、南アジアと中央アジアを隔てる険しい山岳地帯を指す名称である（桑山1990、第一章および第二章参照）。彼の長安到着の日時から逆算すると、このウッディヤーナ訪問は遅くとも710年代前半のことだったと考えられる。

（3）カーブルシャーとウッディヤーナ

さて、ではこの時のウッディヤーナの突厥王とはいったい誰なのだろうか。もっとも可能性が高いのは、この人物が、カーブルからガンダーラを治めていたテュルクシャー＝カーブルシャー王家の一員だったことであろう。善無畏から十年ほど後にこの地域を訪れた慧超は、ガンダーラが罽賓の突厥王の支配下にある、と述べている。また8世紀の中頃ウッディヤーナはカーブルシャーの支配下にあったと考えられている。すなわち、『旧唐書』巻198、『新唐書』巻221下、『唐会要』巻99、『冊府元龜』巻966にそれぞれ、天宝四年（745年）、罽

有白鼠旋繞。日獻金錢。講毘尼於突厥之庭。而可敦請法。乃安禪樹下。法為金字。列在空中。突厥宮人。有以手按其乳。乳為三道飛注和上口中。乃合掌端容曰。此我前生母也。或誤舉刃三斫。支體無傷。斫者唯聞銅聲而已。至雪山下大池。」

- (5) 文言はやや異なる。「至迦濕彌羅國。薄暮次河。而無橋梁。畏浮空以濟。一日受請於長者家。俄有羅漢。降曰。我小乘之人。大德是登地菩薩。乃讓席推尊。畏施之以名衣。升空而去。畏復至烏菴國。有白鼠馴遊日獻金錢。講毘盧於突厥之庭。安禪定於可敦之樹。法為金字列在空中。時突厥宮人以手按乳。乳為三道飛注畏口。畏乃合掌端容曰。我前生之母也。又途中遭寇舉刃三斫而肢體無傷。揮劍者唯聞銅聲而已。前登雪山大池。」

賓王弘菴闍婆の子勃訶準が父の後を継ぎ、闍賓と烏婁（ウッディヤーナ）の王になった、とある。さらに、伝ガルディーズ出土大理石ガネーシャ像に関する桑山の詳細な研究によれば、この神像は Ōḍiyāna（ウッディヤーナ）王ヒンガラ（Śrī Śāhi Khimḡāla）によって745年以降に奉献されたものであり、このヒンガラはカーブルの支配者で、おそらく勃訶準かその子孫の誰かにあたるという（桑山1991）。

ウッディヤーナがいつ、カーブルシャーの支配下に入ったのかについては、善無畏の碑銘が存在するとはいえ、やや不明確な点も残る。『冊府元龜』巻964は、具体的な名前はあげないものの、開元8年（720年）にウッディヤーナ王が即位したことを伝える。慧超は720年代半ばにこの地方を通過しているが、ウッディヤーナに突厥がいることを言わない。それゆえ上掲の善無畏碑銘中に見える突厥王宮廷での話も、もしかしたら善無畏がカシミールからウッディヤーナを経てガンダーラにおいて突厥王宮廷に至った、と読むべきなのかも知れない⁽⁶⁾。しかし明らかにそうであるという証拠が他にない限りは、碑銘の内容に忠実に8世紀初頭すでにウッディヤーナがカーブルシャーの支配下、あるいは少なくとも強い影響下にあったと考えておくべきであろう。

3 フロム・ケサルとコートン

(1) コートン王家との婚姻

9世紀に編まれ、後にチベット語に翻訳されたコートンの年代記『于闐国授記 (*Li-yul-luñ-bstan-pa*)』にも、断片的ではあるが興味深い情報が見える⁽⁷⁾。

(6) 桑山（1990）によれば、6世紀中葉を境にして、北西インドと中央アジアを結ぶ幹道は、インダス上流域、カラコルム山脈西端を越える道から、ヒンドウークシュ山脈西部、バーミヤーンを経由する道へと変化した。8世紀初頭の善無畏はそれゆえ、ウッディヤーナからガンダーラを経て西行し、ヒンドウークシュを越えた可能性もある。しかし、後述のようにカラコルム道自体がまったく用いられなくなったわけでもないので、この時善無畏がどこを越えて中央アジアに出たのかは不明とせざるを得ない。ちなみにヒンドウークシュ山脈南麓では湖の存在は知られていない。

(7) ヒル（John E. Hill）（1988: 184）は、このテキストが746年頃に成立したと考えている。しかし吉田豊（2005: 81-82）は、ヒルの説をデジャトフスカヤ（Vorob'eva-Desjatovskaja）および張広達・榮新江の説と比較したうえで、テキストの成立とチベット語への翻訳年代について、後者の見解を支持しており、ここではそれに従う。

同書は Hphrom Gesar なる王がコータン王の義父であったとしているのである。

次いで、Hgu-zan 寺院の建設者であったヴィジャヤ・サングラーマ Vijaya Saṅgrāma 王は、Hphrom Gesar 王の娘 Hu-roñ-ga との間に二人の娘をもうけた。この娘達は出家し、阿羅漢となった (Emmerick 1957: 69)。

この、ヴィジャヤ・サングラーマ王の義父 Hphrom Gesar 王は、後代チベットの英雄叙事詩の主人公 Gesar との関連で注目されてきたが、フンバッハはカーブルシャー・フロム・ケサルの貨幣を同定した際、さらにそれを『于闐国授記』にみえる Hphrom Gesar と結びつけた (Humbach 1966: 21-22; Cf. Harmatta 1969: 409-410)。このことは、スタン (Rolf Stein), ウライ (Geza Uray), マーティン (Dan Martin) といったチベット研究者の間では注目を引いたが⁽⁸⁾、隣接分野の研究者からはあまり大きな注目を浴びてこなかったように思われる。そこで、この点を、当時のアフガニスタン、北西インド、中央アジアを巡る歴史状況から検討してみよう。

『于闐国授記』自体は、伝説的内容を多く含み、歴史資料としてそのまま使用するのが難しいとされている。内容自体も相互矛盾するものが含まれていたりするが、それでも、この書に登場する王達を漢籍に見えるコータン王に比定する試みは行われてきている。それらによれば、ヴィジャヤ・サングラーマ王とは漢籍に見える伏闍雄におおよそあたるらしい (Hill 1988: 181-182; Kumamoto 1996: 38; Cf. 吉田2005)。後で詳細に述べるが、伏闍雄は674年から692年まで王位にあった人物で、もしこの比定に従うなら、7世紀の第4四半期のコータン王がフロム・ケサルの娘婿だったということになる。

(2) トハーリスターンのハラジュ王女

前述のように、『于闐国授記』に見える Hphrom Gesar に関するわずか一行の記事について、それを歴史的事実の記録と見て良いかどうかは、簡単には決めがたい。しかしながら、間接的ではあるけれど、この、当時カーブルとコータンの間に婚姻が結ばれたと覚しき記述の信憑性を補強するかもしれない情報

(8) ゲサル伝説の概要については Stein 1981 参照。ゲサルという名前の起源については Uray (1985) と Martin (2001: 33, n.11) に論じられている。

がある。本論冒頭に紹介したバクトリア語世俗文書の中で、校訂者シムス-ウィリアムス (Nicholas Sims-Williams) が文書 T と分類しているもののなかの次のような記述がある。

478年、第二の新年の月、私 Bagaziyas、偉大なるテュルクの王女、Qutlugh Tapaghliġh Bilgä Säviġ の王妃、ハラジュの王女、カダグスタン (Kadagstan) の女主人は、Bek の息子、神官 Kamird-far の仲介によって神 Kamird に、病であった王子の命を助けてくれるよう願った。そして、大いなる力と奇跡とによって、神 Kamird は御子を生かし、健康となしてくださった。…… (Sims-Williams 2000: 98)

よく知られているように、現在まで発見されているバクトリア語世俗文書の大部分は、ローブ (Rob/現 Rūy) の王の文書庫に由来する。しかしながら、この文書に登場する王妃/王女は「カダグスタンの女主人」と称している。ギズラン (Rika Gyselen) はササン朝の行政地理に関するその画期的な研究において、ササン朝の印章銘文に見える “*tkstn/Kadagistān*” という銘に注目し、それをバクトリア語文書に見える *kadagstan* と結びつけて、アフガニスタン北北西のどこかにあった地名ではないか、とした (Gyselen 2002: 152)。グルネ (Franz Grenet) はこの同定をより詳細に試み、これを、バクトリア語文書に見えるワルヌ (Warnu)、すなわちクンドゥズ川 (スルハーブ川) 中流域とみなすことを提案している (Grenet 2006)。この地域はトハリスターンにおけるエフタルの最後の拠点があった場所である。シムス-ウィリアムスも最近発表したササン朝の東方領域に関する研究の中でこの同定に同意している (Sims-Williams 2008: 98-99)。以上に基づけば、ここに登場するカダグスタンの女主人たるハラジュの王女とは、ハラジュ族のもとからエフタル王家に嫁いだ人物だったと考えて良からう。バクトリア暦478年は、最近の研究によれば、西暦701年にあたる (Cf. de Bloirs 2006)。そしてこの時期、エフタルのもとへ王女を嫁がせたハラジュの民としてもっとも可能性が高いのは、カーブルシャーである。

このような婚姻が戦略的意図のもとでなされたのは当然のことであろう。北からヒンドークシュ山脈を越えようとした場合、一般にはフルム川流域を遡るか、あるいはクンドゥズ川を遡るルートを採用。グルネらの比定通り

カダグスタンがクンドゥズ川中流域であるとするなら、そこがヒンドークシュ越えルート上に占める戦略的重要性は明らかである。また、709年にアラブに対して反乱を起こしたネーザク・タルハン（Nezak Ṭarkhān）が、事前に取り決めてあった手筈通りに、ヒンドークシュ南麓のカーブルシャーのもとへと逃れようとした際に、サマンガーンからバグラーン、さらに川上へと向かったことは、ヒンドークシュ南北の地域の間、この時期密接な関係があったことを示唆している⁽⁹⁾。

かくして、カーブルとコータンの間に婚姻が結ばれたとすれば、それも同じ文脈から解釈できるのではなかろうか。インダス上流域、カラコルム山脈の西端をぬってのびる隘路は、歴史上、北西インドと中央アジアを結びつけてきた。エフタル時代、このルートこそがインドと中央アジアを結ぶメインルートであったこと、それが6世紀半ばに変化し、メインルートがバーミヤーンを経由する西側のそれへと遷移したことは、すでに桑山によって明らかにされている（桑山1990; 2002）。しかしながらもちろんその結果としてカラコルム道が完全に放棄されたわけではない。8世紀当時、ガンダーラの中心であったワイハンド（Wayhand/現フンド）は、カーブルシャーの東の都であり、かつこのカラコルム道の南の起点であった（Cf. 桑山1987: 210; Kuwayama 2002: 263）。一方、コータンの方はこのルートの北の端に位置した。このような状況を勘案すれば、カーブルとコータンの間に結ばれたであろう婚姻関係は、トハーリスタンとカーブルの間に結ばれたそれと同様、カーブルシャーの対中央アジア外交の重要な一環だったと考えて、大きくは過たないだろう。

（3）フロム・ケサルの治世

しかしながら漢籍史料や貨幣史料を精査した桑山やゲブルの研究により、カーブルのテュルクシャー王家は7世紀の第4四半期頃から8世紀初頭まで、烏散特勤灑すなわち貨幣に見える *tgyn' hwr's'n MLK'* (=Tegin Horāsān Šāh) によ

(9) Hinz 1990: 164-167参照。タバリー al-Ṭabarī の記述によればネーザク・タルハン はアラブに叛旗を翻す前に、自分の財貨をカーブルに送っておいたという。Hinz 1990: 154参照。

って支配され、私孫闍婆すなわちフロム・ケサルが王位に就いたのは738年を大きくは遡らない時期だっただろうこと、そして745年にはフロム・ケサルの息子勃訶準が後を襲ったことが明らかになっている⁽¹⁰⁾。結局フロム・ケサルの在位期間は10年ほどであったことになる。さて、この彼の在位期間は、上述のごとく674年から692年に在位していたと覚しきコータンのヴィジャヤ・サングラーマ王（伏闍雄）の治世と比較すると、ずいぶんと後のことである。在位年代から見れば、フロム・ケサルの父テギン・ホラーサーンシャーの方が、まだしもヴィジャヤ・サングラーマ王の義父となるのにふさわしい。しかしこの点については、以下のような考察を通じて説明することができそうである。

第一に検討すべきは、『于闐国授記』が記すフロム・ケサルの娘婿の名、ヴィジャヤ・サングラーマは正確なものではなく、実際は彼の息子ヴィジャヤ・ヴィクラマがカーブルシャーの娘婿だったという可能性である。これは実は全く根拠がないわけではない。同じ『于闐国授記』には、ヴィジャヤ・サングラーマには同じ名前の息子がいて、この同名の父子はともに中国に赴いてしばらく同地の宮廷にとどまり、その後息子のみが帰国してコータン王の座に就いた、という記述がある（Emmerick 1967: 59）⁽¹¹⁾。また同じく『于闐国授記』が、ヴィジャヤ・ヴィクラマがヴィジャヤ・サングラーマの息子であるとも記していることから、ヒルは、息子の方のヴィジャヤ・サングラーマが即位した際に名前を変えたのか、あるいはヴィジャヤ・サングラーマには別にヴィジャヤ・ヴィクラマという名の息子がいたのか、どちらかであろうと考えている（Hill 1988: 188, n.23; Kumamoto 1996: 57, n.33）。

この点については『旧唐書』巻98杜暹伝に興味深い記述がある。それによれば杜暹は開元12年（724年）に安西副都護に任じられたが、

翌年（725年）、コータン王尉遲眺は秘かに突厥や諸蕃国と同盟を結んで
[唐に] 叛こうとした。暹は秘密裏にこの謀計に気づき、軍勢を派遣して

(10) Göbl 1967: 143, 桑山1990: 262ff. 及び Kuwayama 2002を参照。

(11) ただし佐藤長は中国に赴いたこの父子は実はヴィジャヤ・サングラーマとその息子ではなく、ヴィジャヤ・キールティ（Vijaya Kīrti）とその息子のヴィジャヤ・サングラーマだったのだとしている（佐藤1958: 378-379）。

王を捕らえ、処刑した。謀議に加わった五十名以上の仲間も処刑された。杜暹は新しい王を据え、コートンはようやく落ち着いた¹²⁾。

これが、8世紀の最初の三十年間で、コートンが他の国々と盟を結んだことを知らせる、漢籍に見える唯一の情報であることから、この時の同盟にカーブルシャー王家とコートン王家の間の婚姻も含まれていた可能性は高い。そうであるならこの婚儀は725年以前に結ばれたものということになる。

それでも、この日付はやはり、フロム・ケサルの即位よりも前のものである。前述のように、テギン・ホラーサーンシャーの在位は五十年以上の長きに及んだと考えられ、彼の退位は老齢のためだったと史料に見える。フロム・ケサルが即位したとき、果たして何歳だったのかはわからないが、それでも父王の年齢を考慮するなら、彼が即位前から、王国の統治の任を、少なくとも部分的には担っていたとみて間違いないだろう。慧超は、カーブルの王が季節に応じてカーブルとガンダーラの間を往来していた、と記している（桑山1992: 40）。カーブルシャーの都がカーブルであるとするなら、皇太子を副都であるガンダーラ（ここではワイハンド/フンド）に副王として任じていた可能性は高い。そのような例は歴史上数多くあるからである。このことを考慮するなら、なぜカーブルとコートンの間に婚姻が結ばれたのか、そしてなぜそれが即位前のフロム・ケサルによってなされたのかは了解できる。ガンダーラの副王として、フロム・ケサルは特に王国の東方領土の統治を委ねられていた。彼の王としての治世が738年ころから745年頃までだったことを考慮すれば、副王としての彼の任務が始まったのは、遅くとも710年代のことだったのではないかと推察される。

以上の考察に基づくなら、カーブルとコートンの婚姻は725年以前、おそらくは720年前後のことだったと考えられる¹³⁾。

(12) 「明年于闐王尉遲眺。陰結突厥及諸蕃國。圖為叛亂。暹密知其謀。發兵捕而斬之。并誅其黨與五十餘人。更立君長。于闐遂安。」

(13) 『旧唐書』の記述に、杜暹が、この同盟がまだ公にならないうちに気づいた、とあるところから見て、コートンとテュルクおよび他の国々との間の同盟が結ばれたのは725年の直前だったとも思われる。しかし、『于闐国授記』によれば、コートン王はカーブルから来た王妃との間に二人の子供をもうけているから、その婚姻が、尉遲眺が唐軍に処刑される直前のことだったとは考えにくい。ところで上述の通り、『于闐国授記』は婚姻がヴィジャヤ・サングラーマとフロム・ケサルの娘の間で結

4 8世紀のカラコルム越えルート周辺の政治状況

(1) ガンダーラ、ウッディヤーナ、インダス最上流域（附图参照）

先に見たように、善無畏はウッディヤーナにおいて突厥王に会ったわけだが、745年以前にウッディヤーナがカーブルシャーの支配下、あるいは少なくともその強い影響下にあったとするなら、上述のガンダーラ副王はもしかしたらワイハンドではなく、ウッディヤーナにいたのかもしれない。というのも745年に勃匭準が即位した際、漢籍史料は彼が「罽賓と烏菴」の王となった、と述べているからである。しかしさらなる証拠が得られないうちは、この想像は脇に置いておくほうがよかろう。いずれにせよウッディヤーナの確保はカーブルシャーにさらに北方、ダレル、ポロール、パミールといった地域への足がかりを与えたと思われる。善無畏の話も、あるいはフロム・ケサル王の娘がコートンに嫁いだであろう話も、このことと結びつくに違いない。

ガンダーラ、あるいは北西インドからカラコルム西端を經由して東トルキスタンに行くには二つのルートがあった。一つは5世紀に法顕が辿ったもので、彼はコートンから罽叉（タシュクルガン）、陀歴（ダレル）、烏菴（ウッディヤーナ）を経てガンダーラ（このときはペシャーワル）へと至った。智猛や曇無竭といった僧侶もほぼ同じルートをとった⁽¹⁴⁾。第二のものは、6世紀初頭にエフタル王のもとを訪れた宋雲と恵生のそれである。彼らのルートは鉢和（ワッハーン）から、波知（ゼーバク）、賒弥（チトラル）を経て烏場に下り、ガンダーラに至る、というものであった。ダレル、ポロールを通る前者のルートの方がより

ばれたとする。ヴィジャヤ・サングラーマはヴィジャヤ・ヴィクラマと同一人物かもしれない、後者は漢籍史料に見える尉遲暉（『資治通鑑』巻205では尉遲暉）に同定されている。一方で725年以前に他国と秘密裏に同盟を結んだコートン王は尉遲暉である。それゆえ、漢文史料に見えるこの二人の王は実は同一人物であり、ともにヴィジャヤ・ヴィクラマのことである可能性は否定できない。Skjaervø 1991: 261, Table 2a, 264参照。

(14) 智猛は勃匭を通ったとされるので、法顕のルートとはやや異なり、タシュクルガンからギルギット、チラスを経てウッディヤーナに出たと思われる（大正55: 113参照）。

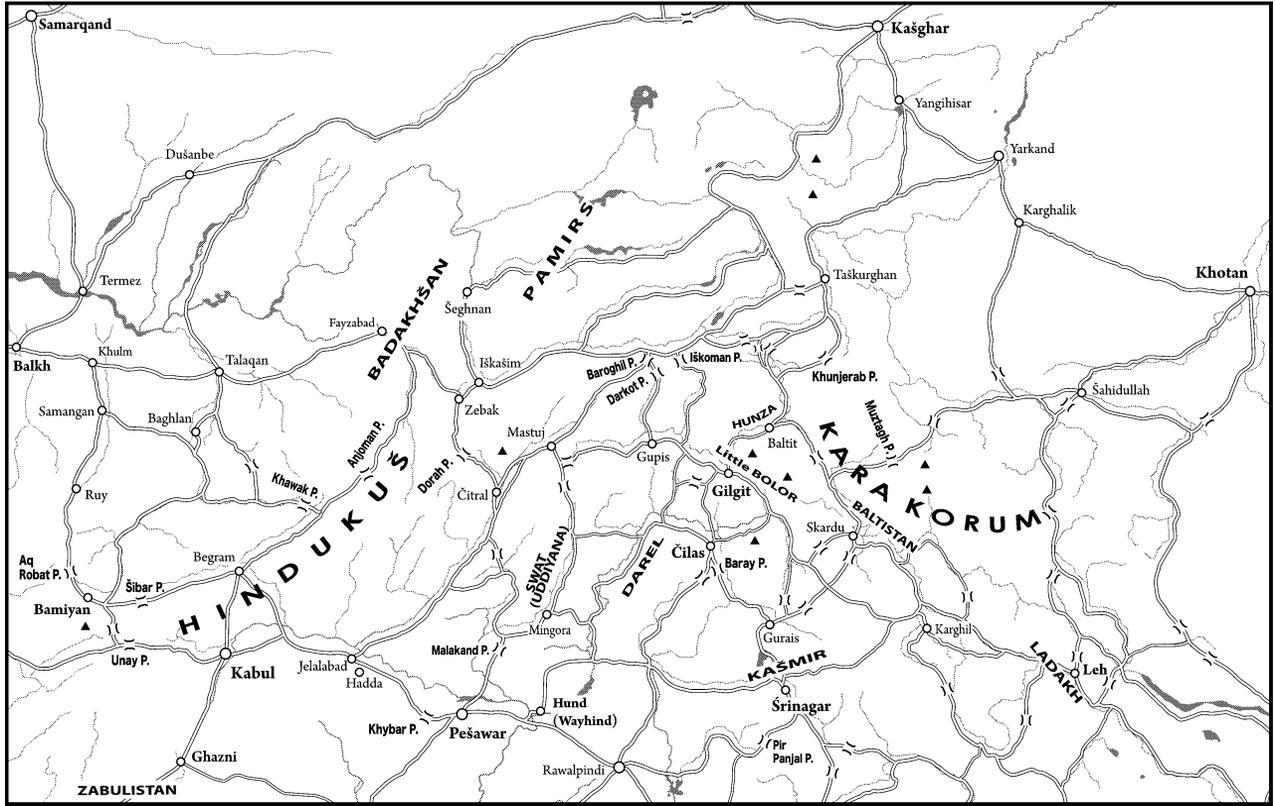
直線的にガンダーラと東トルキスタンを結んでおり、カーブルシャーがこのルートを通じてコートアンと結びつこうとしたのだ、と結論づけられれば話は簡単なのだが、どうもそうはいかないようである。

(2) Paṭola Śāhī

北西インドからさらにインダス川最上流域にかけての地域について、現在我々がもっている情報は、唐代漢籍史料の、特に吐蕃、勃律関連の記事と、インダス川沿いで発見された線刻碑文に限られている。この線刻碑文に関するパキスタンとドイツの共同調査隊の成果は、このほとんど知られていなかった地域の歴史に新たな光を投げかけた。イエットマー (Karl Jettmar) によれば、パトラ・シャーヒー (Paṭola Śāhī) と呼ばれる王家が8世紀にいたるまでインダス川上流域を支配していた。このパトラ Paṭola というのは、あるいは Palora と書かれ、漢籍史料の勃律やアラビア語史料の Balūr はこれを写したものと考えられている。この王家はすでに4世紀にはギルギットとバルティスタンに勢力を確立したが、7世紀には吐蕃の圧力が増大し、最終的には722年、吐蕃によって征服された。当時東トルキスタンを抑えていた唐朝はこれに対応すべく、高仙芝率いる軍勢を勃律に派遣した。高仙芝軍は首尾良く小勃律を制圧し、吐蕃の影響力を排したが、パトラ・シャーヒーが再び復活することはなかったらしく、結局これらの地域は再び吐蕃の支配を受けることとなる (Jettmar 1993: 77 ff.)。

カーブルとコートアンの婚姻が結ばれたのは、まさにこのパトラ・シャーヒーの最後の日々にあたる時期であった。唐、吐蕃、これにカシミールが加わってこの地域の支配を争ったことに起因する政治的不安定さは、この地域を通じたカーブル、コートアンの連絡をある程度困難なものとしたのではないかと思われるが、残念ながら現状ではそれは憶測以上のものとはならない。新たな史料が得られない限り、カーブルシャーと中央アジアの連絡が実際にこの地域を通じて行われたのか、あるいは行われなかったのか、確かなところはわからない¹⁵⁾。

(15) 10世紀以降、Trakhana と呼ばれる王達がこの地域を支配したことが知られている。Trakhana はテュルク、あるいは中央アジア起源のタイトル tarkhan に由来する



附 图

5 カシミールとカーブル

(1) 悟空の記録するカシミール

このように、インダス川上流域を通じたカーブルとコータンの連絡は、あまり確実なものではないのだが、8世紀半ばカシミール、ガンダーラに滞在した悟空の残した記録を通じて、別の連絡ルートを想定することができそうである。スタイン (Sir Aurel Stein) の研究によって明らかなように、悟空はもとは唐の官吏で、俗名を車奉朝といった。彼は751年、唐へ送られてきた罽賓からの使節への返礼使節団の一員としてインドへ向かったが、病にかかり、同僚が帰国した後もガンダーラにとどまった。病が癒えると彼はカシミールにおいて仏教を学び、受戒した。その後彼はガンダーラに戻り、インド各地を歴訪した後、790年に長安に戻った。彼の伝は円照により、「大唐貞元新訳十地等経記」として残された。

カシミールに滞在していた間、彼はカシミール王とその一族によって建立されたいくつかの仏教寺院を目にしたが、それらの中には「也里特勤寺」「可敦寺」と呼ばれるものがあり、それぞれ突厥の王子、突厥の皇后の建てたものだったという (大正17: 716)。悟空がカシミールに滞在した時期は、有名なカシミール王ラリターディティヤ・ムクターピーダ (Lalitāditya Mukṭāpīḍa) の治世であり、*Rājatarāṅgīnī* によるかぎり、この王も王家も突厥とはなんの関わりもない。それゆえ、上記の寺院を建立した人物はカシミール王の一族以外の者だったことになる。

悟空はもうひとつ「將軍寺」と呼ばれる寺院の名をあげるが、スタインはこれを *Rājatarāṅgīnī* にみえる、Tukhārā Caṅkuṇa なる人物が建てた寺院に同定し

とされ、そこからこの王達もテュルク系だったとみなされている。ダニ (Ahmad Hasan Dani) はこの王達が8-9世紀には登場していたと考える (Dani 2001: 167 ff.)。ダニによれば、パトラ・シャーヒーの滅亡後、テュルクシャー、すなわちカーブルシャーの影響のもと、テュルク系の人々がこの地域に入り込んだのではないかと推測している。しかしエットマーは Trakhana の登場をもっと後の出来事と考えている (Dani 2001: 155; Jettmar 1993: 111参照)。

ている。そうしてこの *Caṅkuṇa* がトハーリスターンの突厥＝西突厥に関わる人物だったと見て、上述の突厥王子や突厥皇后についても同様にトハーリスターンの突厥と結びつけている (Stein 1896: 19-21)。しかしながら、現在の我々の知識から見れば、この突厥はカーブルのテュルク王家、すなわちカーブルシャー王家と関連づける方がよい。というのも、悟空は同時期のガンダーラについて、カーブルシャー王家の手でそこに多くの仏教寺院が建立されていると報告しているからである (逆に我々はトハーリスターンの突厥による盛んな仏教寺院建立の事例を現在のところ有していない)。それゆえ悟空の記録する「也里特勤寺」, 「可敦寺」は、カーブルシャー王家の一族の手で、仏教の重要な聖地であるカシミールに建立され、寄進されたものだと考えるのが最も整合的な解釈である。このように、カーブルあるいはガンダーラとカシミールは、少なくとも仏教を通じて実際に連絡があったのである⁽¹⁶⁾。

(2) カシミールとコータン

一方、カシミールとコータンについて見れば、我々は8世紀以前から両地が仏教を通じて緊密な関係にあったことを既に知っている。玄奘は、コータン仏教の起源がカシミールからやってきた阿羅漢ヴァイローチャナ (Vairocana) に遡る、とする伝承を紹介しているが (『大唐西域記』巻2; Beal 1884: ii, 311-312), このヴァイローチャナは『于闐国授記』にもやはり、コータン仏教の始祖として登場している (Emmerick 1967: 25)。同様の連絡のあり方は、後代10世紀にもやはり見られる。*Saka Itinerary* と呼ばれるコータン語文献は、カシミール王アビマニュグプタ (Abhimanyugupta) (在位958-972) の時代における、コータンとカシミールを結ぶ交通路を記録している (Bailey 1936; 1960)。その交通路は、ギルギット、チラスを経てカシミール盆地に入るもので、おそらくはバライ峠を越え、グライスを経由する道だと考えられる。この *Itinerary* はまた、交通

(16) もう一つの可能性として、ここで登場する可敦がガンダーラのテュルクからカシミールに嫁いだ人物で、突厥王子とはその息子である、という解釈も成り立つ。しかし、もしそのような事態だったのだとしても、それはカーブル／ガンダーラとカシミールのより強固な結びつきを証するものに他ならない。

路に沿っていくつもの僧伽藍があったことを伝える。この時代にもまだ、コートンとカシミールの仏教の間に結びつきがあったことの、これは証となる。ちなみにイエットマーはこの *Itinerary* に見えるルートが、ミンタカ峠、キリク峠を越えフンザ峡谷を通過するより直線的なものではなく、西に迂回してパローギル峠、ダルコト峠を越えてヤスイン渓谷を下る道であることに注意を喚起しているが (Jettmar 1993: 103), クリンプルク (Max Klimburg) は、後者の道は、フンザ川上流の恐ろしく切り立った崖沿いの道にくらべ、ずっと通過が容易な道だと述べている (Klimburg 1982: 33)。

8世紀におけるカシミールとコートンの関係については、『于闐国授記』に興味深い記述がある。

この二人の貴人 (ヴィジャヤ・サングラーマの二人の娘) は、一人が御名を *Si-la-ma-ta* とおっしゃり、もう一人の御名を *Gau-sa-ra* とおっしゃった。彼女たちはカシミールから宙に浮かび、彼女たちの母フ・ロンの善知識としてお越しになったのである (Emmerick 1967: 69)。

この文章の意味するところは今ひとつわかりにくいのだが、しかしながらここで二人の王女がカシミールから飛んできた、と書かれていること、および『于闐国授記』の別の箇所、シーラマタとガウシャラはカシミールからやってきた二人の尼僧だと書かれていること (Emmerick 1967: 71)、を勘案するなら、彼女たちがカシミールにおいて得度した可能性は高い。それゆえこの一文もまた、8世紀におけるコートンとカシミールの仏教的結びつきを示す証左となろう。

以上をまとめるなら、8世紀におけるカーブルとコートンの間の連絡は、少なくとも仏教を通じたそれについて見れば、カシミールを媒介として十分あり得たと考えられる。

(3) 謝颯特勤からの使節

8世紀初頭におけるカシミールと吐蕃の抗争に関する記録の中に、もう一つ興味深い情報が見いだせる。ラリターディティヤの即位年はおおよそ723年頃だと考えられているが、『冊府元龜』巻979はその翌年に、謝颯の特勤の使節が唐朝に送られてきたことを伝えている。使節は次のようなことを語ったという。

すなわち、710年に友誼の証として唐から吐蕃へ輿入れしていた金城公主は、両国関係の悪化をうけて秘かにカシミールに使者を遣わし、彼女を助けてくれるよう要求したという。しかしながらカシミールは独力では吐蕃に対抗できないと考え、謝颯に支援を求めたというのである (Cf. Chavannes 1903: 293; 関根 1978: 107-108)。しかしこの話にはいくつか問題が含まれている。なによりも、地理的に見てガズニから南西に広がるザープリスターンにあたる謝颯が、カシミールに直接支援を行いうるとは考えられない。この使節の来朝は実は慧超がヒンドークシュ南麓を訪れたのとほぼ同じ頃の出来事なのだが、慧超自身が語るところによれば、カシミールと謝颯の間には、国力を増した罽賓すなわちカブルがあったのである。

ここで特に興味を引くもう一つの点は、使節を派遣した謝颯の支配者が「特勤」すなわちテギンと呼ばれていることである。同じく『冊府元龜』巻964は、720年、唐は葛達羅支頡利発を謝颯王に、葛達羅支特勤を罽賓王に冊封していることを述べ、同じ内容は『旧唐書』、『新唐書』、『唐会要』などの史料にも見えている。それゆえ724年の記述において、謝颯王が頡利発ではなく特勤と呼ばれているのは奇妙に思われる。この問題に対するもっとも理解しやすい解答は、本来は罽賓とされるべきところが、何らかの理由で資料には謝颯と書かれてしまったのであり、使節そのものは実際は罽賓王によって送られたものだった、というものであろう。間接的ではあるが二つの情報が、この「なんらかの理由」を推定する手助けをしてくれる。

ギズランは最近、ザープリスターンにおいて発行された、*tegin* という銘を持つ貨幣の存在を明らかにした。発行の正確な日付はわからないが、おそらくは680年代から8世紀半ばにかけてザープリスターンを統治した三人の *rtbyl*、すなわちザープリスターン王の誰かにあたる可能性がある¹⁷⁾。残念ながらこの

(17) Gyselen 2009a: 154-156; ASCC 113 and 118 in Gyselen 2009b 参照。このタイプの貨幣については2008年11月に開催された学会 “Iranian Huns and Western Turks: Archaeology-History-Numismatics” においてギズラン博士が報告された。筆者はギズラン博士のご厚意により、学会報告論集用の草稿を参照することができた。記して謝意を表する。680年代以降のザープリスターンにおけるアラブ・ササン式貨幣については Gyselen 2008: 123-127も参照。

タイプの貨幣については不明な点が極めて多いが、現在のところ二つの可能性が想定できそうである。すなわち、

1. 三人の *rtbyl* のうちの誰かが *tegin* という称号を持っていた。
2. 罽賓／カーブルの *tegin* がザープリスターンを服属させ、貨幣はその記念に発行された。

もし、後者であれば、我々は謝颺特勤からの使節に関する『冊府元龜』の記述と、ザープリスターンの *tegin* 貨幣の存在を併せて説明できるかもしれない。つまり『冊府元龜』の言う「謝颺の特勤」は、実は「罽賓の特勤」だったのである⁽¹⁸⁾。『新唐書』巻221下の謝颺国の条の記述はこの推測を支持してくれる。

〔謝颺は〕景雲元年（710年）に使節を送ってきて贈り物を献上した。後、罽賓に臣従した⁽¹⁹⁾。

この記述に従えば、8世紀の10年代のどこかでザープリスターンは、一時的にはあれ、カーブルの属国となったか、あるいはその強い影響下に入ったと思われる。

724年の謝颺からの使節が語ったところによれば、カシミール王ラリターディティヤは強力な吐蕃に対抗するために周辺の諸国と同盟を結ぼうとした。そして、実際そのような同盟がカーブルとカシミールの間に結ばれていたとしても不思議ではないだろう。チベットや唐をのぞけば、ザーブルを属国とし、トハーリスターンのエフタル系勢力とも同盟していたと覚しきカーブルは、カシミール近隣で最も強力な存在だった筈だからである⁽²⁰⁾。

(18) *tegin* というタイトルをもつ王がザープリスターンにおいて貨幣を発行したという事実は、10から12世紀のアラビア語、ペルシア語史料に見える *Teginābād* という地名とカンダハルとの関係を考える手がかりになるかもしれない (Cf. Minorsky 1970: 345; Fisher 1967: 191-192, 210-211; Inaba forthcoming)。

(19) 「景雲初遣使朝貢。後遂臣罽賓。」

(20) *Rājatarāṅgi* (Stein 1900: Book IV, 133) が、「Śāhi はラリターディティヤのもとで高位の臣下であった」、と述べることから、ラリターディティヤの治世にカーブルシャーがカシミールに服属していたのだと見なされてきた。しかしながらこの一文は実はカシミールとカーブルの同盟関係を示唆しているもので、カーブルシャーを臣下扱いしているのは、ラリターディティヤの権威を高めるための誇張表現に過ぎないのではなかろうか。Goetz 1969: 25参照。

6 フロム・ケサルとチベット

以上述べてきたことをまとめれば次のようになるだろう。

1. 8世紀初、ウッディヤーナはカーブルシャーの統治下、影響下にあった
2. カーブルとコータンの間の婚姻は、中央アジア方面に対するカーブルシャーの外交戦略の一環として理解しうる
3. 8世紀前半、カーブルとコータンの間の連絡はインダス上流域のみならず、仏教ネットワークあるいは政治的同盟関係を通じて、カシミール経由でも可能であった。

先に検討した、カーブルと他の近隣諸国との関係を考えあわせれば、8世紀前半において、カーブルシャーは南北東西に向けて活発な外交戦略を用い、その結果ヒンドークシュ、カラコルム山脈の南北を結ぶある種の同盟関係、連合関係が現出されていたと考えられる。別の言い方をすれば、カーブルを中心としてトハリスターン、ザープリスタン、カシミール、コータンが結びつけられていたわけだが、それは対アラブ・ムスリムのみならず、チベットや、時には唐に対抗するためでもあった。このような同盟関係があったとすれば、それはほぼ同時期にソグドの諸都市国家とテュルク族がアラブの征服に対抗して結んだ同盟関係に比較されうるものであろう²¹⁾。いずれにせよ、このような同盟、連合の動きは、どこかで連動しているのかもしれないし、あるいはアラブ、唐、吐蕃のような大国に挟まれた小国群の自然な反応なのかもしれない。

ところで、フロム・ケサルによって発行された貨幣の縁には、彼のアラブに対する大勝利を強調する銘文が見える (Cf. NumH 247 A-K in Sims-Williams 2008b: 123-127)。今のところ、フロム・ケサルとアラブの直接対決に関するさらなる

²¹⁾ シャヴァンヌ (Eduard Chavannés) は漢籍史料の情報に基づいてこの「同盟」について述べている (Chavannés 1903: 291-296)。グルネとド・ラ・ヴェスイエール (Étienne de la Vaissière) は「ムグ山文書」の分析に基づいてソグド都市国家間の実際の関係がどのようなものであったかを描き出している (Grenet & de la Vaissière 2002)。これらの国々に広まっていた「反アラブ」のプロパガンダについてはド・ラ・ヴェスイエールの議論 (de la Vaissière 2007: 43, n.111) を参照せよ。

情報を我々は持っていないが、そのような大勝利があったとすれば、それは彼を反アラブ勢力のヒーローとなし、上述のごときカーブルを中心とする同盟の核としての地位をより強固にしたに違いない。そうであるなら彼の存在や名声が、宗教的つながりや政治的な関係を通じてインダス上流域、カシミールへと伝わり、その後これらの地域と関係が深かった西チベットへと伝播しても不思議ではないだろう。

しかしながら、この8世紀の王の名前が何代にもわたって伝えられ、最終的には4世紀ほど後のチベット東部において英雄叙事詩の主人公の名前となった過程自体は明らかではない。ウライは「世界の四君主」あるいは「世界の四天子」の枠組みの中で、11世紀以前に成立した敦煌文書（Pelliot tibétaine 958）ではフロム・ケサル（Phrom Kesar）が西方の王であるのが、12世紀以降になると北方のテルクの王へと姿を変えたことを指摘する（Uray 1985; 森安2007: 512-515）。ここでこの問題を論じる準備は筆者にはないのだが、それを考察する手がかりは、近年研究が進みつつある西チベット文化の深層にあるのかもしれない⁽²⁾。

中央アジア方面と強固な関係を構築しようとしたカーブルシャーの試み自体は、唐と吐蕃の衝突、勃律王国の分裂、パトラ・シャーヒー王朝の滅亡および吐蕃によるコートン支配といった、インダス上流域以北の政治状況の激変のゆえに、十分な成功をおさめ得なかったと思われる。このような一連の事件は、トハーリスタン、スィースターン方面でますます強まったアラブ・ムスリムの圧力と相俟って、カーブルを核とする同盟関係を崩壊させ、アフガニスタン地域の歴史を新たな段階へと進ませたに違いない。いずれにせよ、もしカーブルシャー・フロム・ケサルがチベットの英雄ゲサルの起源となったとするなら（それは十分あり得ると思われるが）、カーブルシャー王国の外交戦略は、そのような短命な同盟関係と比べれば結果的にはるかに永い生命を持つに至ったところの、予期せぬ成果をもたらした、と言えるかもしれない。

(2) 例えば Klimburg-Salter 1998を参照せよ。

参考文献

- Bailey, H. W. (1936), An Itinerary in Khotanese Saka. *Acta Orientalia* 14-4, 258-267.
- Bailey, H. W. (1960), *Saka Documents: Text Volume*, CII Part II, Vol. V. London.
- Beal, S. (1884), *Buddhist Records of the Western World*. London.
- de Bloirs, F. (2006), Du nouveau sur la chronologie bactrienne post-hellénistique: l'Ère de 223-224 AP. J.-C. *Comptes rendus des séances de l'année, Académie des inscriptions & belles-lettres* 2006 (Avril-Juin), 991-997.
- Chavannes, É. (1903), *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*. Paris.
- Dani, A. H. (2001), *History of Northern Area of Pakistan (Up to 2000 AD)*. Lahore.
- Emmerick, R. (1967), *Tibetan Texts Concerning Khotan*. London.
- Fischer, K. (1967), Zur Lage von Kandahar an Landverbindungen zwischen Iran und Indien. *Bonner Jahrbücher des Rheinischen Landmuseums in Bonn* 167, 129-232.
- Göbl, R. (1967), *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*, 4 vols. Wiesbaden.
- Goetz, H. (1969), *Studies in the History and Art of Kashmir and the Indian Himalaya*. Weisbaden.
- Grenet, F. (2006), Review of Gyselen 2002. *Studia Iranica* 35, 144-148.
- Grenet, F & É. de la Vaissière (2002), The Last days of Panjikent. *Silk Road Art and Archaeology* 8, 155-196.
- Gyselen, R. (2002), *Nouveaux matériaux pour la géographie historique de l'empire sassanide. Sceaux administratifs de la collection Ahmad Saeedi*. Paris.
- Gyselen, R. (2008), Notes numismatiques sassanide et arabo-sassanide. *Studia Iranica* 37(1), 119-128.
- Gyselen, R. (2009a), Two Notes on Post-Sasanian Coins. In *Sources pour l'histoire et la géographie du monde iranien (224-710)*, *Res Orientales* 18, 143-172.
- Gyselen, R. (2009b), *Arab-Sasanian Copper Coinage* (nouvelle édition avec supplément), Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.
- Harmatta, J. (1969), Late Bactrian Inscriptions. *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 17, 297-432.
- Hill, J. E. (1988), Notes on the Dating of the Khotanese History. *Indo-Iranian Journal*

- 31, 179-190.
- Hinds, M. (1990), *The History of al-Ṭabarī*, Vol. 23: *The Zenith of the Marwānid House*. SUNY Press.
- Humbach, H. (1966), *Baktrische Sprachdenkmäler*, I. Wiesbaden.
- 稲葉穰 (2004), アフガニスタンにおけるハラジュの王国. 『東方学報』京都76冊, pp.313-382
- Inaba, M. (forthcoming), KANDAHAR (iv. History, Early Islamic Period, *Encyclopaedia Iranica*.
- Jettmar, K. (1993), The Paṭolas, their Governors and their Successors. In *Antiquities of Northern Pakistan: Reports and Studies*, Vol. 2. K. Jettmar (ed.), Mainz, 77-122.
- Klimburg, M. (1982), The Western Trans-Himalayan Crossroads. In *The Silk Route and the Diamond Path, Esoteric Buddhist Art on the Trans-Himalayan Trade Routes*, D. Klimburg-Salter (ed.), Los Angeles, 24-37.
- Klimburg-Salter, D. (1998), *Tabo: A Lamp for the Kingdom*. New York.
- Kumamoto, H. (1996), The Khotanese Documents from the Khotan Area. *The Memoirs of the Toyo Bunko* 54, 27-64.
- 桑山正進 (訳注) (1987), 『大唐西域記』. 中央公論社.
- 桑山正進 (1990), 『カーピシー=ガンダーラ史研究』. 京都大学人文科学研究所.
- Kuwayama, S. (1991), L'Inscription du Ganeśa de Gardez et la chronologie des Turki-šāhis. *Journal Asiatique* 279 (3-4), 267-287.
- 桑山正進 (編著) (1992), 『慧超往五天竺国伝研究』. 京都大学人文科学研究所.
- Kuwayama, S. (2002), *Across the Hindukush of the First Millennium: A Collection of the Papers*. Institute for Research in Humanities, Kyoto University, Kyoto.
- Martin, D. (2001), *Unearthing Bon Treasures*. Brill.
- Minorsky, V. (1970), *Hudūd al-Ālam: The Regions of the World (translation and commentary)*. C. E. Bosworth (2nd ed.), London.
- 森安孝夫 (2007), 唐代における胡と仏教の世界地理. 『東洋史研究』 66(3), 1-33.
- Rahman, A. (1979), *The Last Two Dynasties of the Śāhis*. Islamabad.
- 佐藤長 (1958), 『古代チベット史研究』 2 卷, 同朋舎.
- 関根秋雄 (1978), カシミールと唐・吐蕃抗争. 『中央大学文学部史学科紀要』 23,

- 99-118.
- Sims-Williams, N. (1997), *New Light on Ancient Afghanistan: the Decipherment of Bactrian*. London.
- Sims-Williams, N. (2000), *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents*. Oxford.
- Sims-Williams, N. (2007), *Bactrian Documents from Northern Afghanistan II: Letters and Buddhist Texts*. London.
- Sims-Williams, N. (2008a), The Sasanians in the East. In *The Sasanian Era*. V. S. Curtis & S. Stewart (eds.), London, 88-102.
- Sims-Williams, N. (2008b), The Arab-Sasanian and Arab-Hephthalite Coinage: A View from the East. In *Islamisation de l'Asie centrale*. É. de la Vaissière (ed.), Paris, 115-130.
- Skjaervø, P.O. (1991), Kings of Khotan in the Eighth Century. In *Historie et cultes de l'Asie centrale préislamique*. P. Bernard & F. Grenet (eds.), Paris, 255-278.
- Stein, M. A. (1896), *Notes on Ou-K'ong's Account of Kaçmîr*. Wien.
- Stein, M. A. (1900), *Kalhana's Rājatarāṅgiṇī: A Chronicle of the Kings of Kaśmîr*, 3 vols. Westminster.
- Stein, R. A. (1981), Introduction to the Gesar epic. *The Tibetan Journal*, 4(1), 3-13.
- 大正：『大正新脩大藏經』百卷。大藏出版。
- Uray, G. (1985), Vom römischen Kaiser bis zum König Ge-sar von Gliš. In *Fragen der mongolischen Heldendichtung*, Teil III. W. Heissig (ed.), Wiesbaden, 530-548.
- Verardi, G. (2007), The archaeological perspective. In *Afghanistan. How much of the Past in the New Future*. G. Picco & A. Lui Palmisano (eds.), Gorizia, 221-252.
- de la Vaissière, É. (2007), *Samarcande et Samarra: Élités d'Asie centrale dans l'empire abbasside*. Paris.
- Vita, S. (1988), Li Hua and Buddhism. In *Tang China and Beyond*. A. Forte (ed.), Kyoto, 97-124.
- 吉田豊 (2005), 『コータン出土 8-9 世紀コータン語世俗文書に関する覚え書き』。神戸市立外国語大学。